

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト(加藤) e-mail:sato@chikyu.ac.jp

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



プラント・オパール (撮影: 宇田津 徹朗)

ユーラシア農耕史
第3回「米の登場の稲作文化」の講座を終えて

宇田津 徹朗 (宮崎大学附属農業博物館)

ユーラシア農耕史

第3回「米の登場の稲作文化」の講座を終えて

宇田津 徹朗（宮崎大学附属農業博物館）

去る7月12日に同志社大学今出川キャンパスにおいて連続公開講座「ユーラシア農耕史 ー風土と農耕の醸成ー」の第3回「米（コメ）の登場と稲作文化」が開催されました。当日は、大変暑い日でありましたが、多くの参加者で教室はほぼ満員の状態でありました。

講座は、佐藤先生の進行の下で、中村先生、宇田津、若林先生の順で中国における稲作の始まりから日本への伝播と広がりについて、最近の研究成果等の紹介を進めながら、対談が行われました。

中村先生からは、まだ一般の出版物では知ることのできない中国の稲作考古学に関する最新の研究成果が、各地の遺跡から出土したさまざまな種子や道具、さらには近年発掘された水田址の写真とともに紹介され、出席者から驚きの声が聞かれました。さらに、先生からは、

中国における稲作の発達（稲作の集約化）や北方へ広がり
の原因を探る上で、「政治組織
の進化」や「コメが宗教儀礼
に必須のアイテムであった」
といった人間社会側の要因を
考える、「稲作の社会考古学」
という視点のお話がありました。



農学が専門である私には、WTO に代表される国家間の関係や「おいしいお米が食べたい」、「モチモチした食感のお米が食べたい」といった消費者ニーズによって、その方向性が振り回されている現在の農業や農業技術の状況が頭に浮かび、非常に納得がゆくお話でした。

私からは、イネ科植物の細胞に土中のガラス成分が蓄積してできたプラント・オパールを紹介とそれを活用した中国と日本における水田址調査の成果について紹介させていただきました。受講者の方からは、現在からおよそ 6000 年前の中国の草鞋山遺跡で発見された水田址については、「これは、水田でしょうか？」という質問が出され、水田の定義などについて話が及びました。この講座に限らず、中国で発見された初期の水田址については、いつもこうした質問や議論が出てきます。その度に、日本の人々と水田稲作との結びつきの強さ（草鞋山遺跡の水田では納得できないというこだわり）を感じるとともに、この問題に決着をつけるには、日本で発掘されている弥生時代の水田（一筆の面積は小さいが、現在の水田と基本的に同じ構造を持ち、水路や堰などを伴うもの）が、中国のどこで、いつ成立したのかを解明する必要性を改めて痛感させられました。



草鞋山遺跡で検出された水田址（左）と青森県垂柳遺跡で検出された水田址（右）

最後に、若林先生からは、「稲作で人が変わる？」というタイトルで、我が国に伝播した稲作が広がってゆく縄文時代から弥生時代への時期における土器や集落、石器の変化を検証しながら、縄文から弥生への変化は、地域単位でみてゆくとそれほど急激なものでなく、もっと連続的なゆるやかなものであるという、「縄文 VS 弥生」といった対照的なイメージを覆す新鮮なお話を聞くことができました。

この講座の魅力は、研究成果の紹介と解説に終始することなく、それぞれの研究者が現在考えていることやこれらの研究の方向性といったまだ形になっていない「生の研究」が、佐藤先生の絶妙な質問によって引き出される点であろうと思います。

なお、「この講座は専門的に難しいのでは・・・」ということで参加を迷ってい

らっしゃる方がいらしたら、心配はいりません。専門的な（一般の方に分かりにくい）説明になってくると、佐藤先生から、「これは、要するに〇〇〇ということですね？」という、つつこみ（「もっとわかりやすく説明してや！」というお叱り）が入りますので、講座の内容に興味をお持ちの方であれば、どなたでも楽しめることは、つつこまれた私が保証させていただきます。ぜひ、多くの方に、この講座に参加していただきたいと思います。